

# *Eternal Star*

綾瀬麻結

## 目次

Eternal Star 1	5
ブーケに愛を込めて	301
誘惑☆ラブゲーム	327

Eternal Star 1

## 第一章 憧れと初恋の狭間で

千佳が初めて男性を好きになったのは、入社一年目十八歳の夏だった。

「君が、鈴木千佳さん？」

「は、はい！」

会議室に重要書類を置き忘れていないかどうか、確かめるのが新人秘書の役目。廊下で管理職の社員たちが出ていくのを待っていた時、突然千佳は声をかけられた。

視線を上げると、目の前にはアシスタントの男性を後ろに従えた一人の青年が立っていた。

入社してまだ間もない千佳でも、彼が誰なのかすぐにわかる。水嶋グループの次期社長と言われている御曹司。まだ二十代の水嶋一貫だ。

そんな雲の上の存在の彼に、千佳は優しく声をかけられた。

「鈴木さんの資格を見せてもらったよ。遊びたい盛りの高校生の時に、よくここまで勉強してきた。人生経験は少ないかもしれないが、大卒者にも決して劣らない実力を持つ

ている。他の新入社員は君より年上だが、そんなことは気にせず仕事に励んで欲しい」

「は、はい！ ありがとうございます」

頬が火照ってくるのを感じながら、しっかりと腰を曲げて深々と頭を下げた。

一目惚れだった。

入社してまだ数ヶ月しか経っていないというのに、御曹司に名前を覚えられていた事実に、千佳はかなり舞い上がった。

これで恋に落ちない女性なんているのだろうか？

男性と付き合ったことも、男性から興味さえ抱かれたこともない千佳が、御曹司に恋に落ちてしまうのは当然の成り行きだった。

さりげなく声をかけてくれた御曹司は、いつも付き従えているアシスタントと話をしながら、千佳から遠ざかっていった。

その背中を、ずっと見つめずにはいられなかった。

父が不況の煽りを受けリストラされたのは、千佳が高校生の時だった。家計を支えるために、毎日バイトに明け暮れる日々を送った。高校を中退して働こうとさえ思ったが、両親がそれを許してはくれなかった。それならばと学校では必死に勉強をし、将来の助けになるような資格を一つずつ取得していった。

それが、功を奏した。地方にも支社を持つ水嶋グループは、大学卒業者のみを採用する大企業として知られている。

だが、千佳はコネも何もない高卒という立場ながらも、有名一流大学出身の志願者たちに混じって面接を受け、最終まで残ることができた。

しかも、憧れの職場として名高い東京本社秘書室勤務という職まで得る。高卒採用第一号者として、千佳の名前は社内報にも載った。

それを見た御曹司が、人事部から千佳の履歴書を取り寄せた。「高卒は一切採らない」という暗黙のルールを、あえて無視した面接チームを呼び出し、彼らの先見の明を称えたという事実を知っていれば、ここまで御曹司を好きになることはなかったのかもしれない。

だが、そんなことをまったく知らない千佳は、御曹司が千佳自身に興味を持ってくれたのだと思った。

ガリガリで貧乳、器量も十人並みで人から注目を浴びたことは一度もない。バイトや勉強ばかりしていたせいで友達がおらず、千佳はずっと一人ぼっちだった。

そんな彼女を初めてきちんと見てくれたのが、御曹司だった。だから、千佳は御曹司に対して自然と胸の高鳴りを覚えたのだろう。

もちろん、女性社員たちの憧れの的と付き合えるとは思っていない。

付き合うとはどういう感じなのかまったく想像すらできないが、初めて男性に興味を抱いたその感情が、恋なのだということだけはわかった。

恋をしていることを隠しきれないほど、夢中になって御曹司の後ろ姿を追うようになった秋頃、千佳の周囲で変化が起こった。

千佳の姿を見つめる男性が、突然現れたのだ。

もちろん千佳の視線は全て御曹司に向けられていたので、誰かに見られていることになどまったく気付かなかった。

御曹司を見つめるだけで、幸せいっぱいだったから……

「優貴さん？」

「わかつてる……今行く」

アシスタントが問いかけると、二十三歳の水嶋優貴はすぐにそう答えた。

優貴は、千佳が恋をした御曹司の弟の一人だった。

表情を崩さず、冷静さを武器にして仕事に取り組む彼を、社内では知らぬ者はいない。

鋭い視線を向けられた他の社員たちは、へびに睨まれたカエルのように何も言えなくなってしまう。優貴は、そういう人物だった。

優貴はしばらく千佳をジツと見つめていたが、背を向けるとその場から立ち去った。

——一月。

彼が室内に一歩踏み込むと、ざわざわしていた管理職専用会議室に静寂が訪れた。

だが、会議室が静まり返るよりも前に、千佳は異変を感じ取っていた。急に息がでなくなり、産毛うぶげが総毛立ったのがわかったからだ。

（また、見られている……どうしてわたしを見るの？ わたし、水嶋さんの機嫌を損ねるようなことをした覚えはないのに）

すでに席に着いているのは、エリートコースを走ってきた四十代後半から五十代後半までの貫禄のある管理職の人ばかり。

その人たちが一瞬で口を閉じてしまうほどの人物、ここまで千佳を狼狽うろたえさせる人物とは、水嶋優貴だった。

水嶋グループ創立者の孫で、現社長の息子の一人。跡取りの長兄を支えるために、経営本部経営管理室に籍を置いている。

優貴はいつも髪を後ろに軽く撫でつけ、ブランドスーツを着こなしていた。しかも、整った眉毛の下にある双そらの目は、見落とすものなどないかのようにいつも鋭い眼光を放

っている。

「失礼します」

背中まで届くほどの長い黒髪を、後頭部でしっかりとシニオンに纏まとめた千佳は、会議室に設置されたテーブルに沿うように歩いた。一階にあるカフェから取り寄せたブレンドコーヒーとミネラルウォーターを置き始める。

入社してから十ヶ月、千佳は資料を配る先輩秘書のアシスタントとして、飲み物を用意していた。

早く用意を済ませて出ていかないと、また先輩に小言を言われてしまう。

だが、優貴の視線が千佳の華奢な軀からだを観察するように眺めているとなると、手が勝手に震えてしまつて機敏きびんに動けない。

（ダメよ、しっかりしなさい！ もうすぐ御曹司が会議室に入ってくる。わたしは、御曹司に無様な姿なんか見られたくないと思つているんでしょ？）

その時、会議室の空気が一瞬で変わった。

「そのままできてくれ。就業時間を過ぎているといふのに悪かつた」

御曹司が、アシスタントの妹尾せのおと共に会議室へ入ってきた。

少し乱れた髪を整えようとせず、皆に頷うないて挨拶をしながら席に座った。未来の社長だというのに、茶色のファッション眼鏡が雰囲気きずなを柔らかく見せている。

眼鏡をしている姿は初めて見たが、いつもと違って謎めいた雰囲気かもを醸し出していた。しかも年上の妹尾をアシスタントにし、命令を下すその姿には惚れ惚れしてしまう。いつもなら秘書らしく冷静な態度で行動する千佳だったが、御曹司が同じ場所にいるとなると自然と頬が染まる。

火照りを気にしないようにしながら、コーヒーを置こうとしたその場所に、いきなり手が伸びてきた。カップが当たり、中身が波打つ。

「申し訳ありません！」

当てた人物を見ると、彼は御曹司の弟の優貴だった。

二人の視線が絡まり合うと、千佳の軀からだが恐怖で一瞬震えた。御曹司の前で叱責しっせきされると思うと、今度は恥辱から顔が赤く染まっていく。

だが、優貴は千佳と視線を合わせるだけで、何も言わなかった。

「……申し訳ありません」

再びそう言い、千佳は隣に座る御曹司のもとへ行きコーヒーを置いた。

「ありがとう、鈴木さん」

千佳の目が輝いた。

「……熱いので気を付けてください」

さらに頬を染めてそう告げ、軽く会釈えしやくしてそのまま会議室を後にした。

秘書室に戻ると、他の人たちはすでに退社していた。

「今日の会議って、御曹司二人の目に留まるチャンスだったけど、それでもやっぱり残業は嫌だわ。でも、会議室の後片づけはしなくていいのがせめてもの救いよね。デートができなくなるもの」

愚痴を言いながら、先輩秘書の二人は帰宅する準備を始めたが、その前に千佳のデスクに一つの封筒を置くことを忘れなかった。

「鈴木さん、これ今日中にファイリングしておいてくれる？」

「……はい、わかりました」

先輩から仕事を回されるのもう日常茶飯事だったので、千佳は文句一つ言うことなく引き受けた。もし何か言えば、先輩の機嫌きげんが悪くなるに決まっている。平穩に過ごしたいのなら口答えはせず、できる範囲のことをすればいい。千佳が高校時代に学んだ、世渡り術の一つだ。

「じゃ、よろしくね。終わったら帰っていいから」

「はい、お疲れさまでした」

鞆たもとを手にして更衣室へ向かう先輩たちを見送り、千佳はゆっくりと椅子に座った。

時刻はすでに二十時を回っている。上手くいけば、二十一時には全て終えることがで

きるだろう。

「さあ、しつかりしなさい！」

奮起を促すように声を出し、封筒に入った書類を取り出した。一通り目を通してある程度区わけし、それを持って奥にある資料室へ入った。

どれぐらい時間が経ったのだろうか？

全てのファイルリングを終え、入り口に置いてあるファイルに保管場所を記入している時、突然男性の声が響き渡った。

「誰かいるのか？」

その声に、千佳はビクツと震えた。とてもよく通る声。誰にも有無を言わせない声音を発する人がいったい誰なのか、確認しなくてもわかる。一度聞いたら、二度と忘れることはできない。

千佳は、恐る恐る秘書室へと視線を向けた。電気が点けつばなしのその部屋に、男性が姿を現わした。

何かの視線を感じたのか、彼の顔がゆっくりと動いた。千佳の姿を認めると、射貫くような視線を投げつけてくる。

「す、すみません……。わたし、仕事をしていたので……。でも、もう帰りますから！」  
（お願い……。わたしに近寄らないで。そのまま、わたしを無視して！）

目を伏せながら、千佳は心の中で必死に叫んでいた。にもかかわらず、絨毯が映るその視界に、男物の革靴が飛び込んでくる。

千佳は、飛び上がるほどビックリした。

「……。もう、仕事は終わったのか？」

「はい、もう終わりです」

あと二つ三つの記入が残っているが、それは明日出社してすぐに書き込めば済むこと。彼に仕事は終わったと気付いてもらえるように、ファイルを棚に戻した。男性用コロンが千佳の鼻腔をくすぐる。それほど彼が、千佳の側にいるということだ。

このまま、彼の近くにいることはできない。早く帰ろうと思って勢いよく振り返ると、何かにぶつかった。やっと面を上げた千佳の目の前には、こちらを見下ろす水嶋優貴がいる。

（どうしてわたしを放っておいてくれないの？ いったいわたしが何をしたというの!?!）

「そう、か……」

言葉を詰まらせながら、優貴がボソツと呟いた。優貴が千佳に声をかけたのは、これが二度目だった。

一度目は、今日のような会議が行われた昨年の秋頃。いつものように御曹司が入って



きた時、千佳は職務も忘れて、ポツと頬を染めながら御曹司に見とれていた。頭では早く仕事に戻らなければいけないとわかっていたのに、どうしても視線を逸らすことができない。

そんな千佳を「仕事に戻れ！」と一喝したのが、目の前にいる優貴だった。

御曹司を見つめていたと知られたこと、その彼の前で叱られたことがとても恥ずかしく、すぐに謝ってその場から逃げるように立ち去った。

それ以降、優貴から声をかけられることは一度もなかった。

だが、千佳が本社ビル内を動き回っていると、時折強い視線を感じるようになった。ふと振り向けば、資料を手に持った優貴が立ち止まって千佳を見ている。

そういう視線を頻繁に感じるようになって、千佳はだんだん彼のことが怖くなった。

彼は千佳がもつとも苦手とするタイプで、一生関わり合いたくはないと思ってしまうような人物。平穩に過ごしたいのなら、目をつけられないようにするのが一番だ。

それが、千佳の本音だった。

優貴の視線を感じても、今までは言葉を交わすことはなかった。千佳は心のどこかで安心してた。

だが、今……彼がその垣根を飛び越えてきた！

「……すぐに、電気を消しますから」

「電気を、消す!？」

突然、優貴が驚いたように声を上げた。何故、目を大きく見開いて千佳を見つめてくるのかわからない。

「はい。仕事を終えた以上、節電を心がけるのは社員として当然のことですから」

優貴から離れるように少し身を引くと、声が震えないように努めながら告げた。

「ああ、そうか……節電か。てっきり俺は……」

その次に何の言葉が続くのかわからなかったが、千佳は早くこの場から去りたくて仕方なかった。

「すみません、そろそろ失礼いたします」

軽く頭を下げて、優貴の軀からだに触れないように側を通り抜けた。優貴と距離をおけたことに、ホッと息をついた瞬間だった。

「鈴木さん……俺と、夕食に行かないか？」

「夕食!? 御曹司の弟である優貴さんと? そんなの、わたしには絶対にできない!」

千佳は恐怖に顔を引き攣つらせながら、勢いよく振り返った。

「申し訳ありません、わたし……お断りさせていただきます」

ペコッと頭を深く下げ、逃げるように自分の席へ戻り鞆たもとを手に取った。

（助けて……誰か助けて! わたし、誘いの断り方なんて知らない。こんな態度を取っ

ていいのかさえもわからない。でも、わたしは早く……彼から逃げ出したい！」  
 軽いパニック状態だった千佳の耳には、周囲の音はまったく聞こえなかった。頭の中で雑音がずっと鳴り響いていたので、優貴が素早く動き出したことにさえ気付かない。優貴に電気を消すと言ったことも頭になかった千佳は、そのまま廊下へ逃げ出そうとした。

その時、千佳の華奢な手首に強い力が加わった。痛いと思うと同時に、いつの間にか優貴が千佳を見下ろしていた。

その顔は、どこか鬼の形相に似ている。恐怖の聲が口から出そうになったまさにその瞬間、優貴の顔が近付いてきた。何をしようとしているのか理解できないまま、千佳は優貴に奪うようなキスをされた。

ファーストキスだった。

突然触れた柔らかな感触に千佳は叫び声を上げたが、その声は全て優貴の口の中に吸い込まれた。口を開いたことにより、生温かいねっとりとした感触が千佳の舌を絡め取る。それが優貴の舌だとわかった時、千佳の軀は一瞬で硬直した。そうかと思えば、痙攣を起こしたようにブルブルと震え始める。

しかも、意思とは無関係に軀の芯が熱く火照り出した。誰にも触れさせたり見せたりしたことはない秘部が、脈打つように蠢き出す。

今まで体験したことのない軀の変化にビックリして、優貴の胸を思い切り押しつけて彼の抱擁から逃げ出した。

足がガクガクと震えてよろめきそうになった。こちらを無表情のまま見下ろしてくる優貴に視線を向ける。

優貴の唇が光っていた。思わず、千佳も手を上げて自分の唇に触れた。彼にキスされたことで、少し腫れているように感じる。

「どうして……、どうしてこんな真似を？」

言葉にしたことで、千佳の中でいろいろな感情がぶつかり始めた。それを象徴するよ

うに、双の瞳から涙が零れ落ちる。  
 (どうしてわたしにキスなんてしたの？ しかもいきなり！ こんな扱いを受けなければいけないなんて。ファーストキスは御曹司としたかった……それが無理でも、せめて好きになった人としたかった……)

「……千佳」

名字ではなくいきなり名前を呼ばれて、千佳の頬は真っ赤に染まった。キスをされたことよりも、さらにいけないことをしているような感覚を覚えた。

優貴が何かを言い出す前に、千佳は彼に背を向けて走り出した。足音がまったくしない絨毯の上を走り、一般の女子社員とは別に設けられた秘書専用の更衣室に逃げ込む。

息を弾ませながら、ロッカーを開けた。扉の内側に貼り付けられた鏡に、千佳の顔が映る。

涙で光る瞳を見た後、赤く腫れた唇へ自然と視線が落ちた。あまり面識のない優貴かにもかかわらず、千佳の頬はほんのり染まり、喜びが溢れ出しているように見える。

（何、この表情。いきなりキスされて怒っているんでしょ？　なのに、どうしてわたしは……恋をしている女性のように輝いて見えるの？）

恋とは、縁遠い学生生活を送ってきた。御曹司に恋をしてはいるものの、他の女性社員のように付き合いたいという強い気持ちを抱いてはいない。

ただ、御曹司を想うだけで幸せだった。彼を見るたび、頬が染まるその瞬間に幸せを感じていた。

それなのに、御曹司を見た時と同じように、優貴のキス一つで千佳の頬がピンク色に染まるとは思いつかなかった。

（わたし……いったいどうしてしまったの？　優貴さんを、好き……なの？）

その考えに、千佳は一瞬で青ざめた。

無理やりキスを奪うような相手が好きになるとは、正気の沙汰ではない。むしろ、嫌いになるのが当然だ。

とんでもないことを考えてしまう前に、千佳は急いでロッカーから通勤着を取り出す。秘書は私服で良かったが、千佳は通勤着と仕事着とは別になっている。上着に手をかけた時、指が胸元を掠った。その瞬間、千佳は思わず呻き声を漏らした。

「うっ……」

乳首が、異様なほどピリピリしている。寒さが原因で乳首がツンと硬く突ることはあっても、意思表示するように痛むのは初めてのことだった。

「これは、いったい何なの？」

病気が何かだと思った千佳は、思わず泣きそうになった。

新しい仕事に就いた父だったが、それでも以前に比べて収入は少ない。給料のほとんどを家に渡している千佳にとって、余分な出費のことを考えたくはなかった。

病院に行って診てもらった方がいいのかもしれないが、家でゆっくりすればこの症状は治まると信じた。

その考えに継りたかった千佳は、急いで服を着替えて更衣室を出た。

どこかで優貴が待ち伏せしているのでは……という考えが脳裏を過ることはなかった。ただ、早く家に帰り着くことだけを考えていた。

優貴は、そんな千佳をロビーの片隅からジッと見つめていた。

——四月。

ファーストキスを奪われて以来、千佳は自分の感情を持って余していた。

あれから何ヶ月も経ち、すでに季節も春を迎えたというのに、心はまったく成長していない。

好きなのは、御曹司唯一人。彼が悠然と歩く姿を一目見られるだけで、心がほんわかと温かくなつて幸せを感じる。

……そうだった、はず。

目の前に積まれた書類を見ながら、千佳はため息を一つ吐き出した。

最近、自分でもまったく理解できない感情が生まれていた。それをどう表現したらいいのかわからない。

（好きな人以外の男性のことが、こんなにも気になつてしまうなんて……。これって普通なの？ それとも、わたしが変なの？）

優貴にキスをされた翌日から、突然彼の行動が変わったことを千佳は思い返す。

今までは遠くからこちらを見つめるだけだったのに、千佳が残業で一人秘書室にいるのを見計らつては、優貴が現れるようになった。

そして、必ず千佳を夕食に誘う。その誘いを、千佳は毎回丁寧に断る。そういうこと

が、週に三回の割合で繰り返されるようになった。

千佳の頭から御曹司の姿が霞み始めてきた二ヶ月前、御曹司も出席する会議が開かれた。いつもなら、御曹司に声をかけてもらえるかもしれないと期待しながら仕事をする。

だが、今回は御曹司のことよりも、御曹司と一緒に出席する優貴のことが、千佳の頭から離れなかった。

軀を舐めるように見つめてくる優貴の視線に軀を震わせながら、いつものように仕事をした。優貴に飲み物を出すために側へ近寄つた時、彼の男性用コロンが千佳の鼻腔をくすぐった。

たったそれだけで、秘書室内の資料室で二人つきりになったこと、キスをされた時のことを思い出してしまふ始末。慣れたように舌を挿し入れられて舐められたことが脳裏に浮かぶと、乳首が痛いほど張り詰めていくのがわかった。

その時のことを脳裏から振り払うように、千佳は小さく頭を振った。

（わたし、本当にどうしたの？ 優貴さんと関わり合いたくはないと思ってるし、毎回誘われるのも迷惑だと思ってる。なのに、どうしてわたしは……。こんなにも時間を気にしてしまふの？）

千佳は、秘書室で自分の椅子に座りながら、壁に掛けられた時計へと視線を向けた。

あと数分で、時計の針が二十時三十分を指す。そして、優貴が秘書室に現れる……

ゆつくりと<sup>まぶた</sup>瞼を閉じて、千佳は膝<sup>ひざ</sup>の上で握り拳を作った。

（待っているの？ 優貴さんが、わたしの前に現れるのを？ こんなにも怖いと感じる相手をも？）

何故、こんな気持ちになるのかまったく理解できない。

突然、肌<sup>かわ</sup>がゾクツとした。誰かに見られているような錯覚を覚えて、目を開けて周囲を見回すも誰もいない。

きつと、優貴のことを考えていたからだろう。

千佳は肩から力を抜いて視線を膝に落とし、これからどうすればいいのか再び悩み始めた。

親しくしている女性や、友達と呼べる人がいれば相談もできただろう。そういう人が、一人として側にいないことがとても悲しかった。

だが、たった一人だけ……千佳の脳裏にある女性が思い浮かんだ。千佳の目の前の席に座る、同期の桜田<sup>さくらだ</sup>菜乃だ。

千佳に話しかけてくれるのは、社交辞令だと思っていた。高校時代も仕方なさそうに声をかけられたことがある。その時の苦い記憶が今でも脳裏から離れない。

そのため、優しく接してくれる桜田とも、親しくはできなかった。その彼女に、いきなりこんな話をしたら引かれてしまうに決まってる。

誰にも相談できないのであれば、自分で何とか考えるしかない。この不安定な気持ちから抜け出せる方法がないのか、千佳は必死で考え始めた。

この状況から脱却したいのなら、いつもと違うことをすれば、また気持ちに変化が起きるかもしれない。

夕食の誘いを断らずに承諾すれば、違ったことが起こる？

優貴のことを怖いと思っているのに、二人で食事をするなどできるのだろうか？ いくら考えても答えは出てこない。

千佳は、再びため息をつき、ゆつくりと<sup>おもて</sup>面を上げた。そろそろ優貴が現れる時間だったので、視線を秘書室の入り口へと向ける。

思っていたとおり、そこにはすでに優貴が立っていた。

だが、彼を見ながら千佳は<sup>いぶか</sup>訝しげに目を細めた。

（えっ？ あれは、優貴さん？）

何かがおかしかった。千佳の本能が、彼は優貴とは違うと叫んでいる。

でも、何が違うのか千佳にはさっぱりわからなかった。

ジツと彼を見つめていると、突然女性を<sup>とうろ</sup>蕩かすような笑みを向けてきた。そのことに、千佳は驚愕を隠せなかった。

優貴のことを詳しく知っているわけではない。彼とはいっても同じ言葉しか交わさない

し、二人つきりになった時でさえ、こんなにも人懐っこい笑みを向けるようなことがなかった。

千佳は、入り口に佇たまたまんでいる彼をさらに観察し始めた。

すると、いくつか異なる点が見えてきた。髪を後ろに撫でつけてる優貴とは違い、彼は今風に髪を無造作に遊ばせている。そして、優貴にはない笑い皺しわが微かに目元にある。それは、いつも笑っている証拠。優貴には、決して当てはまらないもの。

だが、優貴と背格好や目元や口元、鼻の形までが瓜二つだ。

つまり、彼は社内の子の間にあたる水嶋康貴みづしま こうき。優貴とは一卵性双生児で彼の弟にあたる水嶋康貴。

同じ顔、同じ目でこちらを見てくるのに、何故何も感じないのだろうか？ 相手が優貴だと、あんなにも恐怖を覚えてしまうのに。

千佳は秘書の仮面を被り、冷静に椅子から立ち上がった。

「何かご用でしょうか？」

「えっと、秘書は君一人なのかな？ ……それならいいや。仕事が山積みのようにだし。また明日お願いするよ。じゃ」

軽く手を上げ、康貴はそのまま千佳の視界から消えた。

今のはいったい何だったんだろうと首を傾げながら、千佳は仕事に戻ろうとした。

その時、資料室の入り口付近で黒い影が動いた。ビククリした千佳は、思わず叫びそろになり口元を手で覆おおった。それが誰かわかると、違う悲鳴が漏れそうになった。

そこには、口元を綻はらばせている優貴が立っていた。

千佳の心臓が、ドキンと高鳴る。

康貴の笑みには何とも思わなかったのに、何故優貴の優しそうな口元を見ただけで、こんなにも胸がときめくのだろうか？

今でも、優貴の側に近寄ることができないほど、怖いという気持ちはあるのに……

千佳は、まったく知らなかった。

いつもより少し早く来てしまった優貴が、資料室に身を潜め、瞼まぶたを閉じて一生懸命何かを考えている千佳を見ていたということ。

そして、双子の弟に対して何の興味も抱いだかず、仕事モードに切り替えて冷静に対応する千佳を、さらに愛おしく想い始めたということ。

一歩一歩、優貴が千佳に近付いてくる。

千佳は、何か強い意思を秘めてこちらに向かってくる優貴を、ただ青ざめながら見ているしかなかった。

「また、仕事を回されてしまったのか？」

千佳は、チラッと自分の机の上にある書類の山を見る。

「今年は……新入社員が秘書室へ入ってこなかったから」  
その言葉だけで、全て優貴に通じた。何故か、一番下っ端の千佳の境遇を知っているからだ。

「……夕食、一緒にしないか？」

いつもと同じように一方的な物言いだったが、今日はいつもと違うように聞こえた。先程、初めて優貴が口元を綻はなやはせたのを見たからだろうか？

（どうするの？ さつき考えていたことを実行するの？ それとも、いつものように断る？）

頭の中でどうしようか迷っていると、優貴がさらに一歩前へ足を踏み出した。あまりにも千佳の近くへ寄ってきたので、慌てて誘いの返事を口にした。

「……はい」

自分の口から肯定する言葉が出てきたことに、千佳は驚きを隠せなかった。それは、優貴も同じだったようだ。

目を大きく見開いて、千佳をジッと見つめている。

いまだに彼に対して恐怖を感じるが、優貴を見てみると、よくわからない温かなものが胸の奥でトクントクンと高鳴る。

御曹司には、まったく感じたことのない感情だ。

「本当、に!? 千佳、ありがとう……」

優貴に初めて呼び捨てにされたあの日以来、彼は会う度に千佳を名前で呼ぶようになっていた。迷惑だと思っていたはずなのに、今日は何故かくすぐったく感じる。

（わたし、本当にどうしたのかしら。優貴さんが怖いのに……恐ろしいのに、毎回誘うことを諦めず、紳士的に振る舞ってくれる彼と食事したいと思ってしまうなんて）

返事をしたことによって、いつの間にか優貴と一緒に食事をする日を心の奥では望んでいたと気付かされた。

だが、それを表に出せるほど千佳は強くなかった。

優貴は、会社からほど近い場所にあるタイ風レストランへ千佳を連れていった。

大きなビルの七階にあるレストランは、五階の大きなホールから伸びる専用のエスカレーターに乗らなければ入れない、少し変わった造りになっている。

レストランに足を踏み入れると、入り口から階段を少し下りる形でフロアが広がっていた。照明が暗く、テーブルに置かれたフード付きのランプが星のように綺麗に輝いて見える。

高級そうなレストランに連れてこられた千佳は、少し不安を覚えた。贅沢とは縁遠い生活を送っているため、こういう場所で一度も食事をしたことがない。

男性と二人きりで食事をするというのも初めての経験だった。

水嶋家の御曹司の一人である優貴と食事をする場合、どんな態度で接すればいいのだろうか？

促されるまま案内された窓際に座ると、正面に優貴が堂々と座った。

（ああ、彼はこういう場に慣れてる！ それなのにわたしは、初めてで……何をどうすればいいのかもわからない！）

「この店のお薦めコースでいいか？」

千佳は優貴と視線を合わすことができず、小さく頷いた。

だが、見かけとは違って心の中は騒然としていた。

まず、コースとなれば値段は高くなる。お財布の中にいくら入っていたのか、まったく思い出せない。

どうしてこんな高級そうなレストランに入る前に、もっと安いお店へ行こうと言わなかったのか、悔やんでも悔やみきれなかった。

さらに、優貴はいつの間にか白ワインの試飲までしている。その姿は優雅で、ウェイターが彼に尽くす執事のように見えた。洗練された振舞い、他者への接し方、全てにおいて気品を兼ね備えている。

優貴が水嶋グループの御曹司の一人だということが、改めて理解できたような気がし

た。

そんな彼と、共に食事をすることになるとは……

千佳は、どんな血の気が失せていくのがわかった。膝の上でしっかり握っている両手は、微かに震えている。

「……聞かせて欲しいんだが」

いきなり問いかけられて、千佳はハッと息を呑んで面を上げた。

「何で、しょうか？」

表情が強ばっているのを承知の上で、視線が定まらないまま優貴の方へ顔を向けた。

上司や役員たちの前では、難なく秘書の仮面を被れるというのに、何故か優貴の前では上手く作れない。

「俺の、弟を見て……どう思った？」

まったく予想すらしていなかった質問に、千佳は思わず優貴と視線を合わせてしまった。

「ど、どう……って、特に、普通ですけど？」

質問の意図が読めず、千佳は吃りながら答えた。

（何と答えて欲しいの？ わたしが康貴さんをどう思っているか、なんて……そんなことがどうして気になるの？）



不思議に思った千佳だったが、意味をなさないその答えで優貴は満足したようだった。少し俯うつむいているが、口元が綻ほころんでいるのがわかる。しかも、すぐに面おもてを上げて、好意を示すような視線を千佳に向けてきた。

今度は、千佳が目を伏せる番だった。

(これはいったいどういうこと!?! もしかして……優貴さんは、わたしのことが好き?)  
恋愛経験ゼロの千佳でさえ、そう思わずにはいられなかった。そう考えれば、千佳を見つめてくるその意味や、今年の一月に突然キスを奪われたことにも納得がいく。

だが、千佳は優貴から好意を向けられたくはなかった。勇気を出して彼の前に座ってはいるものの、優貴から発せられるオーラが怖くて堪たまらない。

優貴には、御曹司に抱いだくようなほんわかと温かくなるものが何一つない。彼といえるだけで神経がピリピリし、彼が動くたびにビクッと軀からだが震える。話しかけられても、何と答えたらいいのかわからず、適切な言葉が出てこない。

御曹司に対してはすんなりと言葉が出てくるというのに、どうして優貴に対してはこうも身構みかまえてしまうのだろうか?

千佳は、恋というものをせず勉強ばかりしてきたので、憧れと恋の違いが何なのか、まったく理解できなかった。

まさしく、清純な乙女そのものと言っていい。

もし、優貴に対してのみ起こるあの軀の反応の理由がわかっているならば、この後……あんな酷いことは起こらなかったかもしれない。

千佳は何を食べているのかわからないほど緊張したまま、料理を口に運んでいた。

優貴から話しかけられない限り、こちらからは何も話すことはなく、食事は淡々と進んでいった。会話がないう状態が続けば続くほど、千佳の緊張はどんどん高まっていく。

食後のデザートが出された頃には、千佳の神経はピンと張り詰め、いつ切れてもおかしくない状態だった。

その時、優貴が口を開いた。

「千佳は、俺の兄が……まだ好きなのか?」

いきなりの質問に、千佳の心臓がドキンと高鳴った。視線を上げると、こちらを見つめる優貴の目にはいつも以上に力が漲みなっていた。しかも、少し緊張しているようにも見える。

優貴は、千佳の想い人が御曹司だと知っている。一度、会議室で御曹司に見とれていた時に、彼から叱責しっせきを受けたことがあったからだ。

嘘うそについてもバレるだけだと思った千佳は、何を訊きかれても正直でいようと口を開いた。

「……はい」

「俺よりも!？」

優貴よりも、御曹司の方が大好きに決まっている。頭ではわかっているのに、何故か千佳の口からは言葉が出なかった。

真実を素直に話せばいいのに、それが本当の気持ちなのかわからなくなっている。

(何しているの? 御曹司の方が好きだって、はっきり言えればいいのに……)

自分の眉間に皺が寄っているとは気付かず、千佳は恐る恐る優貴へと視線を向けたが、すぐに面を伏せた。

心臓が痛いぐらい激しく高鳴る。握り締めた掌には、少し汗が出て湿気を帯びていた。優貴は返事を待っている。このまま口を閉ざしていても、千佳の緊張は解けることはない。

だが、何かが引つかかかって思うように声が出ない。自分でも理解できない感情が、心に訴えてくる。

そのことに躊躇いを感じながらも、千佳はこの緊張から逃れるためだけにゆっくりと口を開いた。

「わたしは……御曹司のことが好きです」

その声は囁きに近かった。

「それは、変わらないのか? 俺が、千佳に付き合って欲しいと言っても?」

その言葉に、千佳は勢いよく面を上げた。

(優貴さんが、わたしと付き合いたい? まさか、そんな……!)

顔面蒼白になりながら、千佳は優貴へと視線を向けた。彼がからかっているのかとも思ったが、そんな風には見えない。

つまり、優貴は本気でそう言っている。

千佳にキスをしたあの日から、彼のアプローチは始まっていた。ここ数ヶ月続いた夕食の誘いは、千佳の中にある警戒心を解かし、彼のことを考えずにはいられないようにさせた。

千佳に、優貴という男を意識させるように仕向けた。

(ああ、わたしは彼の術中に見事嵌まってしまったんだわ……)

千佳は、優貴が嫌いだったのではない。秀でた容姿、威圧的な態度、有無を言わせない鋭い眼光、それら全てを合わせ持つ男性がとても苦手なのだ。優貴は、まさしくこの男性に当てはまった。

だから、優貴とは正反対の御曹司をすぐに好きになった。なのに、今は御曹司よりも優貴のことばかり考えてしまう。

優貴の前ではどうして身構えてしまうのか、何故彼には温かな気持ちが湧き起こらな

いのかはわからない。それでも、千佳の心を支配するのは、いつの間にか優貴へと変わっていた。

彼は、なんと恐ろしいのだろう。

千佳の顔から、さらに血の気が失せた。

（絶対知られてはいけない……。いつの間にか、御曹司よりも優貴さんのことが気になるようになってしまったことを）

「わたし……優貴さんと付き合うことは絶対にありません。優貴さんの弟の康貴さんと、付き合うことはあっても……」

もちろん、康貴のことは何とも思っていない。好意を抱いていなければ、他の女性社員のように近付きたいとも思わない。

にもかかわらず、何故康貴の名を出したのかというと、彼と会った時には、優貴に感じるピンツと張り詰めるような緊張を感じなかったからだ。

いつの日か、男性と付き合う日が訪れるのなら、そういう男性と付き合いたい。そういう理由で、千佳は康貴の名前を出した。

だが、千佳は知らなかった。二人を比べるようなことだけは、決してしてはいけないということ。

双子には、双子にしかわからない感情というものがある。特に、優貴は弟と比べられ

ることを極端に嫌っていた。

そのことを知らない千佳は、知らず知らずのうちに地雷を踏んでいた。

優貴の顔が怒りで赤黒くなり、千佳を凄（じ）い目で睨（にら）んでくる。そうとは知らない千佳は、必死に自分の心を隠すように俯（うつむ）いていた。

——ガシャン！

突然、食器がぶつかる音が聞こえた。

ビツクリした千佳が面（おもて）を上げると、目の前に座っていた優貴の姿はそこにはなかった。何故いないのかと思った時、いきなり凄（じ）い力で手首を掴まれた。

千佳は、あまりにも強い力に顔を撃（う）めた。

だが、見上げた瞬間飛び込んできた優貴の怒りの形相に、手首の痛さはどこかへ吹き飛んだ。

「……優貴、さん!? あの」

「来るんだ!」

いったい何が起こったのかまったくわからない。

優貴に引つ張られるまま薄暗いフロアを歩き、躓（つまず）きながら階段を上る。彼が精算をしなかったことにも気付かないままに、千佳はビルから外へ連れ出された。

（ああ、怖い! どうして、優貴さんはいきなりこんな行動を? しかも彼はとても怒

っている！ どうして怒っているの？ わたしは、ただお付き合いはできないと言っただけなのに……)

このまま新宿駅で別れることになると思っていたが、そうはならなかった。優貴は駅へは向かわず、北東へ急ぐように歩く。

歌舞伎町二丁目……

商業施設へ寄ることはあっても、千佳はその奥の路地へ足を踏み入れたことはなかった。

でも、今……優貴に腕を掴まれて二人でその場所を歩いている。奥手の千佳でも、周囲にあるラブホテルがどういふことをする場所か知っていた。

何かを言いたいのが、何を言えばいいのかわからない。引つ張られるまま、男に黙って従ってはいけない。頭ではわかっているが、いつの間にか恐怖よりも恥ずかしさが勝っていた。

優貴は、視界に入る全てのラブホテルの中から、まるで通い慣れているかのようにモダンな造りのホテルへ入った。

先に部屋を決めようとしていたカップルが目飛び込んでくる。彼らが何をしようとしているのかわかった千佳は、思わずそのカップルから顔を隠すように俯いた。

そのため、慣れた手つきで優貴が部屋を選んだことにもまったく気付かなかった。

再び強い力で引つ張られて、千佳は転びそうになった。そんな彼女に気付くことなく、優貴はエレベーターへ乗り込む。

狭い空間に、二人つきり……

千佳の心臓が激しく高鳴ると同時に、これからどうなってしまうのかという恐怖が湧き起こる。気持ちちが落ち着かないうちにエレベーターが停まり、そのまま優貴に引つ張られて、黒を基調としたモダンな内装の一室へ連れ込まれた。

シャンデリアの光に照らされた大きなベッドは、そこだけが妙に浮かび上がって見えた。ベッドにはサテンらしき黒色のベッドカバーが掛けられ、とても妖しげな雰囲気醸し出している。天井につけられた鏡に何の意味があるのかわからないが、とてもエロティックに感じられた。

こういうホテルは、男性と女性が裸になって……欲望のまま淫らに振る舞う場所。

(そういう目的で、わたしを連れてきたのではないわよね？ そうでしょ!?)

千佳の勘違いだと言って欲しかった。レストランを後にしてから一言も発しない彼の口から、安堵できるような言葉を聞きたかった。

だが、千佳の思いは届かなかった。

優貴は、千佳をベッドに放り投げるように手首を離した。突然の行動に、そのまま

ツドに倒れた千佳はいったい何が起こったのかわからなかった。  
長い髪を振り乱して面を上げると、優貴はスーツを脱ぎ捨て、ネクタイを緩めながら千佳を見下ろしている。

「ゆ、優貴さん……」

優貴の目は据わ<sup>す</sup>わっていた。こちらを凝視しながら、ワイシャツのボタンをどンドン外していく。

「やめて……お願い」

彼が何をしようとしているのか、それは想像でしかわからない。千佳にとって、今起こっていることは未知の世界のことだからだ。

「兄を好きだということは理解できる。だが、俺と康貴とではいったい何が違うというんだ？」

レストランを出て、初めて優貴が言葉が発した。

千佳は、優貴が何を言いたいのかわからなかった。

だが、今言葉を繋げなければ大変なことになると思い、この状況から脱すべく口を開いた。

「全然違うわ！ 康貴さんなら、わたしをこんな風に扱ったりはしない」

そして、こんな恐怖を味わわせたり、彼のことばかり考えさせたりするような真似は

決してしない。理解できないドキドキするような感覚を、送り込んだりはしない。

全てにおいて、優貴と康貴では千佳に与える影響が違う……ということをつもりだった。

だが、説明が足りない千佳の言葉を優貴はそのまま受け止める。そのせいで、彼の怒りはさらに増幅した。

「今夜、康と会った時はほんの少しも興味を抱<sup>いだ</sup>かなかった。それなのに康のこともわかるというのか!？」

「わかるわ！」

悲鳴に近い声で、千佳は言った。

（わかるわ……わかるわよ。康貴さんは、優貴さんと違ってとても紳士的だった。御曹司もそう。こうやってわたしの心を掻き乱し、恐れを抱かせ、信じられないような軀<sup>からだ</sup>の反応を起こさせるのは、優貴さん唯一<sup>ただ</sup>一人だけだもの！）

「俺の……俺の何が駄目なんだ！」

ダメなことなど、何一つない。そう言いたかったが、いきなり優貴が千佳に覆<sup>おさ</sup>い被さるように軀を押しつけてきた。そして、千佳の顎<sup>あご</sup>を掴んで荒々しいキスをする。

「……っん！」

突然のキスに最初こそ抵抗できなかったが、優貴の手が素肌の鎖骨に触れた時、千佳

は手を振り回して抵抗した。

「イヤ、やめて！」

唇が離れると同時に、千佳は叫んだ。

こんなことを望んではない。こういう行為はまだするべきではない。心が一つになった時、初めて軀も結ばれるべきだ。今は、まだその時期ではない。

それに、優貴は千佳を愛しているのではない。ただ抵抗し続ける彼女が物珍しいだけ。そういう思いに辿り着いた瞬間、千佳の心の中で急速に悲しみが広がった。優貴から逃れようと振り回していた腕から、力がするっと抜け落ちる。

脱力した両方の手首を、優貴の大きな手が掴んだ。そのまま、千佳の頭の上で固定する。

優貴は、肩で息をしながら千佳を見下ろしている。すでにボタンが外れたワイシャツの隙間から、優貴の引き締まった強靱な肉体が見えた。

男をアピールしてくるその軀から目を逸らすと、千佳は優貴の顔を探るように視線を向けた。

御曹司には劣るかもしれないが、優貴の顔は女性が振り返ってしまうほど素敵だ。それに、会社での地位と財産もある。身長も高く、余分な贅肉が見られないその肉体は、男性モデルのようだ。仕事熱心なために言動が冷たい印象を受けるかもしれないが、こんなにも素敵な優貴なら女性なんて選り取り見取りなはず。

(なのに、どうしてその辺の女性たちの中で埋もれているわたしを求めるの？ 抵抗するわたしが珍しいの?)

「こんなことをして何になるの？ 間違っているわ」

優貴の表情が悔やむかのように歪んだが、それはほんの一瞬だった。

「間違っているかどうかは、あとでわかることだ……」

優貴は、すでに決意していた。目に宿る強い意思が、それを千佳に伝えている。

「わたしは、優貴さんと……こうなることを望んではないわ」

今はまだ、優貴に肌を見せてもいいという域に達してはいない。恐れを抱いてしまう相手に、どうしてそんなことができるのだろうか？

反面、もう優貴が千佳のもとへ夕食の誘いに来なくなると思うと、胸に刺すような痛みが走る。

「では、誰となら望むと言うんだ？」

「優貴さん以外なら誰とでも！」

押し寄せる胸の痛みから逃れるには、そう言うしかなかった。

その言葉に反応した優貴は、千佳の首筋の頸動脈を指で圧迫した。息が詰まるような痛みが、千佳を襲う。

「酷い……女だ。俺が、ここまで千佳のことを……想い続けてきたというのに、俺より

も兄や弟を取るといふのか？」

優貴の表情が、苦しそくにどんどん歪んでいく。

過去の恋愛や千佳に目を奪われたこと、心さえも奪われてしまったことを優貴は思い出していた。だが、そのことが千佳にわかるはずもない。

「今度だけは……無理だ。俺は、諦められない！」

千佳の首から手を離すと、優貴はフリルのついた女性らしい千佳のブラウスを、ボタンが弾け飛ぶぐらい力任せに引つ張った。

「キヤア！」

白いキャミソールが露になると、優貴はそれも引き裂いた。

「やめて、やめて……優貴さん！」

軀を捻ったり足をバタつかせたりして、優貴が気を緩めた隙に逃げようとした。

だが、彼の大腿と腰でしつかり押さえつけられ、千佳は動きを封じられてしまった。

優貴の目に、シンプルなブラジャーが晒される。それは大人の女性が着けるような繊細なレース仕立てではなく、ティーン用の可愛らしいものだった。社会人らしからぬその下着に、優貴が目を見開く。

恥ずかしくて、千佳の目に涙が溜まった。

こんな下着を見られたくはなかった。彼が好むような、大人の下着を身につけ、その

下にある乳房はブラから零れるぐらいに大きくあつて欲しかった。

そこで千佳は、ハツとした。

何故、優貴が好むような下着や乳房ではないことを気にするのか？

自分の心と向き合いたかったが、ブラジャーの上から優貴が小さな乳房を掴んだため、意識はすぐに自分の軀へと移った。

「まるで、少女のように小さい……」

優貴は、容赦なくブラジャーのカップをずらした。ラズベリーのよううに熟れた小さな乳首が露になると、優貴はそれを舌で転がし始める。

「い、や……、やめ……っあん」

今まで感じたことのない快感が、軀を一瞬で駆け抜ける。

（これ……何？ いったい何なの!? 勝手にわたしの口から変な声が出るなんて……）

ビクビクした千佳だったが、この襲いかかる快感は嫌いではなかった。この甘い痺れは、クセになってしまいうるほど心地よかった。このまま溺れても構わない……と思っってしまうほどに。

軀の芯が熱くなり、秘部までもが蠢うごめいてくる。優貴に初めてキスされた時とまったく同じ症状だった。いや、それ以上のことが千佳の身に起こっている。

優貴の手が大腿を撫で上げたかと思うと、そのまま千佳の足を大きく開かせた。誰に